

春日部福音自由教会 2020年10月25日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）

聖書 新約聖書 マルコの福音書 9章30節～37節

説教 「何を求めているのか？」 小野信一牧師

I.序

おはようございます。今日はこの中央会堂に集い共に礼拝をささげています。また同時配信によってカメラやマイクを通して音声と映像が伝わっていることと思います。よく見えて、また聞こえていますでしょうか。配信のご奉仕にも感謝しております。

今日は2020年10月25日の主の日、日曜日の朝の礼拝です。主イエス・キリストが日曜日によみがえられた、そのことを覚えて私たちは日曜日の朝に礼拝をささげています。

庄和会堂が新しい土地と建物を与えられてから10年になりました。2010年10月24日に庄和チャペルの新会堂で最初の礼拝をささげたという記録が残っています。そして今日は10月25日ですが、半年・6ヶ月前、7ヶ月前のことを思い出しますと、3月に合同信徒会が中止になって総会を短く行なって、4月には「集まらないで同時配信のみ」という礼拝にして、それから7月からこのように3つの会堂で集まり始めて今に至っている半年があったな、ということだと思います。

いつも教会のカレンダーを作っていますが、今年は10月半ばに2021年の教会のカレンダーのみことばを決めて、それをカレンダーを印刷する業者さんにお伝えしました。このようなみことばにいたしました。

「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」

神様がまず私たちを愛してくださった。だから私たちはこのように行動する。だから私たちも愛します。第1ヨハネ4章19節のみことばをカレンダーのみことばとして決めました。

3月、4月からあっという間に半年が経って、もう10月の下旬なのだなあということを新たに思わされています。もう一度、神様の前にお祈りをささげたいと思います。

II. はじめの祈り

天の父なる神様。今私たちはこの中央会堂に集い礼拝をささげています。またそれぞれ家に留まって、同時配信により礼拝をささげている仲間たち、兄妹姉妹たちがあります。どうか私たちと共にいてください。私たちをひとつとしてください。人生の旅路を歩んでいる私たちと共に、主イエス様が共に歩いてくださいます。今みことばが開かれ朗読されました。地上を歩んでおられた、弟子たちと共に過ごされたイエス様の姿を通して、イエス様の言葉を通して、私たちに語りかけ、問いかけてください。みことばによって私たちの人生を導いてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

Ⅲ. 全部イエス様に話せるか？

今日のみことば、マルコの9章30節から37節ですが、中心として特に耳を傾けたいと思うみことばは、週報にも今週のみことばとして掲げましたが、33節です。イエス様が「来る途中、何を論じ合っていたのですか」とお尋ねになりました。今、イエス様と弟子たちが一緒に歩いてずっと旅をしてきた。そしてカペナウムという町に着いた。ガリラヤ地方が出てくるのはこの9章が、マルコ福音書では最後になります。一緒にイエス様と歩いてやって来たその来る途中、道の途中、旅の道中「何を話していたのか」「あなたがたは何を求めてわたしと一緒に歩いてきたのか」とイエス様が問いかけられたのです。今日はこのイエス様の問いかけを、私たちにも投げかけられている問いかけとして受け止め、そして答えたいと願っています。

ここまでの道中「何を話していたのか」「何に関心を持ち何を求めていたのか」というイエス様の質問です。イエス様と一緒に歩いてきた旅路、この数ヶ月の旅路のこと思い出します。いろんなことがありました。コロナと共に歩んできた日々だったと、そういうことを話題にし、心配し、心を占めていた日々だったと言えるかもしれません。あるいは庄和会堂が新たな場所でスタートした2010年10月から2020年10月までの10年を振り返ってみたら、どんな時間だったでしょうか。あるいは5年でもよいでしょう。いろんな通ってきたところがあった。その中で「あなたがたは何を考えていたのか」とイエス様が問われます。そして「何を話しているのか」「何に関心で、何が話題だったか」と問われます。それはつまり『あなたがたは何を求めているのか』とイエス様が問いかけておられるということです。「お互い同士何を話題にしていた」「心配していたことは何だったか」「追い求めてきたことは何だったか」「あなたたちは何に焦点を当ててきたのか」「何をしようとしてきたのか」イエス様が弟子たちに問いかけ、また私たちにも問いかけておられます。

それをイエス様に答えましょう。「私たちはこういうことを考えていました」「これこれのことを求めてきました」「今も求めているのです」「お互い同士でこんなことを話してきました」「これをしようとしてきました」と全部イエス様に話してみたいと思います。でもどうでしょう、全部イエス様に話すことができるでしょうか。この振り返った数日でも数ヶ月でも数年でもいいのですけれども、考えてきたこと、しようとしてきたこと。

あのイエス様の弟子たちは問いかけられてどうだったでしょうか。あの弟子たちには言えないことがあったのですね。34節で「彼らは黙っていた」と書いてあります。イエス様が尋ねておられる。「何を話していたのか」って。でも彼らは答えられません。イエス様に言えないのです。それは私たちで言えば、祈れないということと同じではないでしょうか。何を考え何を求め、仲間同士何を話していたかイエス様に言えない。私たちはイエス様に言えないことはないでしょうか。

30節から34節のところを見ていきたいと思います。今日のこの聖書は、ご自分の受ける苦難について2度目に予告するイエス様の場面です。30節から見ていきましょう。イエス様は人に知られたくないと思われました。今までガリラヤ地方の旅では多くの人に囲まれ、いつも人々がイエス様を求め、そし

イエス様は多くの人を癒しました。が、今は目立ちたくないとっておられます。弟子たちとだけ過ごしたいとおられます。弟子たちを教えること、弟子訓育に集中しようとしています。それはなぜでしょうか。ガリラヤでの旅はもう続かないのです。これからイエス様はエルサレムへ行こうとしています。死ぬ場所です。エルサレムへの道を整えようとしています。そしてエルサレムへの道に向かって弟子たちを整えようとしています。だから弟子たちとだけ過ごして、弟子たちに教えようとおられる。

31 節に第 2 の受難予告があります。「人の子は人々の手に引き渡され、殺される」そう書いてあります。（「人の子は」とは、つまりイエス様のご自分のことを言われたのです。）これがイエス様の苦難の予告です。このマルコの福音書でイエス様が受難予告をするのは 3 回出てきます。最初が 8 章でした。2 度目がこの箇所 9 章で、3 度目が 10 章。8 章、9 章、10 章に出てきます。この 9 章 31 節の予告が一番短くて、詳しいことが書いていません。つまり 8 章にあったように「律法学者たちや長老たちに渡される」「彼らによって殺される」というようなことが書いてないのです。これはどういうことでしょうか。イエス様を捕らえてイエス様を殺すのは誰なのか？「それはこの人たちだ、あのグループの人たちだ、長老たちだ、律法学者だ、あの人たちだ」と言うようなことがここでは言うことができません。単に「人々の手に渡されて殺される」これは全人類のことだと言われます。単に「ユダヤ人たちが」とか「リーダーたちや学者たちが」イエス様を殺した、というのではなく、【人々が】イエス様を殺すのです。全人類のことなのです。ですからこのイエス様の言葉を聞いた弟子たちも、このマルコの福音書を最初に読んだ読者たちも、そして今 2000 年経ってこの聖書を読む、耳を傾ける私たちも、『私は関係ない』とは言えないのです。『この人々の中に自分もいる』、聖書はそのように読むものです。『イエス様の十字架の死と、私は無関係だ』と言える人は誰もいないのだ、そのことをこの【人々の手に】という言葉は伝えています。イエス様は受難を予告します。『人々、皆に、あなたたちにも、わたしは渡される、そして殺される』。重い言葉です。イエス様の死と私たちが関係があると聖書が言うわけです。

その重い言葉、弟子たちは理解できません。そして理解できないことを、尋ねることもできない。彼らは恐れています。尋ねるのを恐れます。ここにイエス様と「率直に話せない弟子たち」がいます。そしてそれは イエス様と「率直に話せない私たち」「率直に話せない時の私たち」と重なるのではないかと思うのです。

その尋ねられない弟子たちに、イエス様が反対に問いかけます。「道の途中何を話していたのか」と。ここまで一緒に歩いてきた旅の途中「何を求めていたのか」率直にお尋ねになります。「あなたがたにとって大事にしていることは何なのか」と尋ねるのです。しかし弟子たちは率直に答えられません。イエス様に言えないことがあるのです。彼らは誰が一番偉いか、12 人の中で誰が一番上か下か、トップか先頭か、誰が前に立つのか、そんなことを互いに話していたのです。この前の所では 12 人の弟子の中で 3 人だけが呼ばれてイエス様と山に登り、特別なイエス様の輝く姿を見たという出来事がありました。ですからその 3 人、ペテロとヤコブとヨハネは「俺たちこそやっぱり最初なのだ」と思ったかも

しれません。でも他の人たちは「いやそんなことはない」と思ったかもしれない。そんな争いのようなものがある。彼らはその自分たちの関心の焦点が「イエス様の関心からずれている」「イエス様の喜ばれないことだろう」と、どこかでわかっています。だから黙るのです。

IV. 心を注ぎ出す

さて私たちはどうでしょう。私たちはイエス様と率直に話せているでしょうか。尋ねることができるでしょうか。「イエス様、これが疑問なのですが、どういうことですか」って尋ねることができるでしょうか。イエス様に問いかけられたら「あなたは何を考えているの？何を大事にしているの？本当にしたいことは何なの？」と問われたら答えることができるでしょうか。それとも言えないことがあり、黙ってしまうでしょうか。今日はそこに光を当てていただきたいと願います。

イエス様に言えないことがあるでしょうか。問われて黙るのでしょうか。それとも心の内を打ち明けてお話しするのでしょうか。どうでしょう？今日はこのイエス様の問いかけた「来る途中、何を論じ合っていたのですか。」という言葉から、イエス様が私たちの心の願いとか心の中の思いに光を当てて問いかけておられる、そこに心を向けたいと思います。そしてイエス様に問われて「言えないことがある」「言えなかったことがあった」と思うならば、それをお話しさせていただきたいと思います。

皆さんはイエス様に言えないことってあるでしょうか。それとも何でも話せるでしょうか。いろんな意味で私たちには「言えない」ということがあるだろうと思います。「イエス様が喜ばれないだろう、イエス様の心からずれているだろう」と分かっているから言えないとか、「この事は辛すぎて言えない、簡単には口に出せない、たとえ神様に対してでも」と思う、そういうことだからこそ言えない、などがあるのではないかと思います。もし今まで「神様に話せなかったことがあったな」と気づいたならば、この際その心の底にあることを主に話しましょう。

例えばハンナという人の祈りが旧約聖書にあります。第一サムエル記 1 章 15 節前後のところにそのことが書いてあります。先週の礼拝で「私の訴えを神に打ち明ける」とか「御前に心を注ぎ出す」という言い方が旧約聖書にあることを触れました。ハンナもそうでした。ハンナは一人祈っていました。声に出さずに口を動かして祈っていた。それを見た祭司エリが酔っていると思った。長く祈っていました。でも彼女は言います。「祭司様、私は心に悩みのある女です。お酒を飲んでいたのでありません。酔っているのではないのです。私は主の前に心を注ぎ出していたのです」と言います。『思いを注ぎ出す』『打ち明ける』とか『ぶちまける』でも良いかもしれないと言いましたけども、聖書の言い方は『注ぎ出す』ってことです。『心を注ぎ出す』のです。「なぜですか、どうしてですか」と言いたい時がある。聞きたい時、聞きたい時がある。それをぶつける。私たちは黙ってしまうことがあると思うのですが、黙るよりもぶつけられるならばぶつけた方が良いでしょう。もちろん私たちが口に出せないこと、声にならないことも神様は、イエス様はわかっています。そのことを知りつつ信じて「神様、あなたはわかっておられますけれども、でも話します、聞いてください」という祈りができます。私たちも、もし「今まで神様に話せないことあったな」と思ったならば、この際話してみましょ

う。自分のこと、自分の人生や仕事のこと、もろもろのこと、それが一つ。もう一つは自分の家族のこと、神様に話してみましょ。そしてもう一つは自分の教会のこと、いろんな思いを神様に話してみたいと思います。

弟子たちが問いかけられて、自分たちの求めていることが、イエス様には「これじゃ言えないや」と思って黙ってしまった、という新約聖書を読み、そして旧約聖書に「心の底にあることを打ち明けて祈った人たちがいた」ということを見るときに、私たちも率直にイエス様に祈る者でありたいという思いになったのです。ハンナには心の痛みがありました。10節に「心は痛んでいた」と書いてあります。そして16節では「私は募る憂いと^{いらだ}苛立ちのために今まで祈っていたのです」。心の痛み、憂い、^{いらだ}苛立ち、それを主に打ち明ける祈りをしていました。主の前に出て心を注ぎ出す祈りをしていました。私たちもひとりひとりがそういう祈りをさせていただきます。これはある意味では時間がかかると思います。もちろん短い祈りでも、1分でも3分でも正直に率直に神様にお話できたという時もあるでしょう。でも、いろんな複雑なできごと、複雑な思いがある中で、思いの丈を神様に伝える、注ぎ出すには時間がかかるでしょう。12節には「ハンナが主の前で長く祈っている間」という風にあります。長いことハンナは祈りに集中して祈っていたのです。そして心の痛みで「激しく泣いて主に祈った」とも書かれています。また13節にはハンナは「心で祈っていた」とも書いてあります。私たちも様々な心の中、複雑な入り混じる想いの中で、願いや求めを「神様、私が求めているのはこうなのです」とか「神様、私が心が痛んでいるのはこうなのです」ということを祈る祈りをしたいと思います。

ほかにもうひとつだけちょっと祈りの例を挙げると、ハンナの息子サムエルが（この後サムエルが生まれますけれども）第一サムエル8章6節、「サムエルの気に入らなかった」という言葉が出てくるのですね。「王をくださいという民の願いはサムエルの気に入らなかった。」この新しい聖書では「サムエルの目には悪しきことであった」となっていますけれども、前の聖書では「気に入らなかった、それでサムエルは主に祈った」と書いてありました。私たちも「これはおかしいのじゃないか」とか「これは気に入りません」とって神様に思うことがあるならば、それを話すということです。

V. 捉え直して答える

さて、「求めてきたこと、してきたことは何か」と神様に問われてどう答えたら良いでしょうか。もし今答えるとしたら何と答えるでしょう。「はっきり言えないな」とか「うまく言えない、率直に答えられない」と思う人がいるかもしれません。「あなたがたは何を求め、何を大事にし、何をしようとしてきたのか」と言われて、思わず黙ってしまうということがないように思います。

NHKの朝ドラの場面を、今ちょっと思い出すのです。古山裕一さんという人が主人公ですけども、作曲家の古関裕而さんがモデルだそうです。戦争がありました。戦争が終わりました。戦時中と戦後で世の中が変わってしまった。そして自分の心も変わってしまって曲が書けなくなった古山裕一さん。例えば“勝ってくるぞと勇ましく”というような歌をはじめとして、戦時中に彼が書いた歌が、みんなが歌うようになったのですよね。そして彼は戦後思うのです。「私は歌で若い男子たちを戦地に駆り立ててしま

った。私は何てことをしてしまったのだ、もうだめだ、もう曲を作れない、資格がない」と考えます。その古山裕一さんが長崎に永田武医師に会いに行くシーンがありました。これは古関裕而さんが永井隆医師に会いに行ったということなのだろうな、と思って見ました。『長崎の鐘』という本を読んで、それをもとに書かれた歌の歌詞を受け取って、この曲のメロディーを書いて欲しいと依頼を受けたけれど、書くことができない裕一が長崎に会いに行くのです。永田医師が言います。“神様は本当にいるのですか、と問うた若者に私はこう答えたのです。「落ちろ、落ちろ、どん底まで落ちろ」と。”三日間閉じこもった裕一は、原爆投下直後に永田医師が懸命の治療を行なった現場に案内されます。「あの時の兄の気迫は凄まじいものでした」と妹が語ります。その汚れ崩れかけた壁に文字があります。“どん底に大地あり”と。裕一は、「希望を与える歌を」と曲を書きます。書けなかった彼が再び書けるようになったのです。

その古山裕一さんに永田医師が言います。「あの戦争の間、あなたはみんなを歌で応援していたのです。」“勝ってくるぞと勇ましく”というような歌で若い男子を戦争に駆り立ててしまったと裕一は自分を責めます。しかし永田さんは「あなたは人々を応援したのです」と言ってくれました。「自分は歌で人々を戦地へ駆り立てた」という思いから、「歌で人々を応援したのだ」という思いへと、自分の思っていたこと、自分のしたこと、自分の求めてきたこと、しようとしたことを、捉え直すことができたのです。「その時その状況の中であなたがしたことは、その状況の中、精一杯生きる人たちを応援したことなのだ」と言ってくれた人がいました。そしてその人が問いかけました。「戦争が終わった今、あなたにできることは何ですか？」裕一は答えます。「変わりません、応援する歌を作り続けます。」

私たちはどうでしょうか。何を求め何をしようとしてきたでしょう。頑張っただけ奉仕すること、伝道すること、イエス様を伝えること、そして神様にささげること。頑張っただけやってきてよかった。良い時代、そう思えた良い時代がありました。やりがいもあったし、実りもあった。でもその一方で振り返ると、やりすぎだったかなと思ったり、バランスを欠いていたかもしれないと思うところがあるかもしれません。あるいは、もう同じことはしたくないと思うかもしれません。「福音を伝えるのだ、神様に仕えるのだ、教会で奉仕するのだ」という思いを振り返って「自分は間違っていたのかも」という思いになり自信がなくなるということがあってもいいかもしれません。そして、では今、いろんなところを通して今、何ができますか？と問われて、答えられないということはないのでしょうか。イエス様に「あなたたちは何をしてきたのか、何を求めてきたのか」と問われて、答えられないということはないのでしょうか。自分のしてきたことを描きなおす、捉え直す、新しい言葉で自分が何を求めているのかを表現する、私たちにもそれが必要なのではないかと思ったのです。「私は戦地に向かう人を鼓舞する歌を作りました」とは胸を張って言えなかった裕一さんも、「応援する歌を作り続けます」と言うことができたのです。

私たちも「何を求めているのか」と問い直され、「今あなたにできることは何か」と問い直された時、自分の求めること、しようとすることを捉え直し、言い直すことができたと思います。何と言ったらよいのでしょうか。「神様に愛されて、その愛で誰かを愛する人になる、それは変わりません」ということができるのではないのでしょうか。「私は福音の恵みを受け取り味わい続けます。福音の恵みを仲

間と共に分け合います。福音の恵みをまだ知らない人に知らせ届けます。拡げたいです。そのために成長し役に立ちたいです。他の人をリードしたりサポートしたり支えたりケアしたりできるようになりたいです」そのように言うことができるのではないのでしょうか。

VI. 今何を求めているのか？

マルコの9章に戻りますけど35節で、イエス様は「先頭に立ちたいと思うなら」と言われました。誰より先に立ちたい、誰よりも役に立ちたい、と思うことは否定されてはいません。皆の先頭に立つこと、それを願うことをイエス様は否定しておられません。ただ「そう思うなら皆の後ろにつけ、皆に仕える人になれ」とイエス様は言われます。「誰より役に立つ人、先に立つ人は、皆のしもべ、仕え人になるのだ」と言われるのです。35節の「皆に仕える者」という「仕える者」という言葉は元の言葉はディアコノスという言葉で、執事という言葉の元になった言葉です。英語では deacon と言いますけれども執事と訳される言葉、それはつまり〔仕え人〕のことです。「他の人たちを助けたい、リードしたい、役に立ちたい、と思うなら仕える人になりなさい」イエス様がそう言われます。「先頭に立つということは皆の後ろにつくことだ、皆に仕える人になることだ、そういう人になりなさい」イエス様は腰を下ろし、弟子たちひとりひとりの目を見てそう言われたのです。

「ここまで来る途中何を論じ合っていたのか？今何を求めているのか？」とイエス様が私たちにも問いかけます。何と答えましょうか。「みんなを助けたい、リードしたい、ケアしたい、支えたいのです」と思う人たちにイエス様が言われます。「皆に仕える人になりなさい。」

何を考え、何を求めているか、本当にしたいことが何なのか、私たち自身が捉え直す必要があります。「私が求めているのはこれなのです」「イエス様についていく、イエス様を信じてイエス様に従っていくというのはこういうことなのです」「求めているのはこれです」それを主に話し、教会のお互いに話し、家族にも話せるようになっていく。「何を求めているか？」と問われて答えたいと思います。

「変わりません、これからも大事にしたいのはこれです」「主の恵みによって生きていきます」「ここに赦しがある、不完全な私への赦しがある、だから私は私として生きられる、不完全な私がこのままで愛されているという自信を持って、これから少しずつでもイエス様に似るようになれる、変えられる、という希望を持って、こんな私でも神と人の役に立てる人間になれる、神の国の一員としての未来を描けるのです、主の恵みを受け愛する人とそれを共有し、この人たちにも広げていきたいのです」そう主にお答えしたいと思うのです。

私たちはひとつとなつて主の前に祈る者となりたいと思います。ひとりひとりが主の前に出て行きましょう。自分の色んな思いを、今まで話せなかったことも神様に話すことができたと言えるまで、神様の前に出て思いの丈を述べましょう。そうして主に近づいたお互いが、互いに近づけられひとつとされていきましょう。そして教会がひとつに集まって共に祈れるようにしていきたいと思います。大きなことや大切なことを目指し、乗り越え、成し遂げていくには一致が必要です、ビジョンが必要です。集まって一緒に祈ることができるようにと願います。

この半年、信徒会も一度もできずに7ヶ月過ぎました。もう少ししたらどうやって集まったら良いかを考えて、対策をして行なっていきたいと思います。交わりのために、話し合いのために、そして祈りのために、ひとつとなって集まれるように願います。まだ2、3ヶ月かかるかもしれません。その間まず、ひとりひとりが主の前に祈る時を大切にしましょう。そして集まった時、何を祈ってきたか、何を主に話してきたか、お互いに分かち合ひましょう。その日を待ちたいと思います。「何を話していたのですか？何を求めているのですか？」とイエス様に問われたとき、答えられるようにならせていただきます。自分のこと、家族のことを、教会のことを、どんな希望を持って、またどんな絶望を感じて恐れを持って祈ったか、どんな未来を描いて祈ってきたか、話せるようになる時を待ちたいと思います。

主がこの群れに「何を論じあっていたか？」とお尋ねになるとき、「主よ、私たちが求めているのはこれです」と言えるように、ひとりひとりの祈りにおいて、また群れの祈りにおいて、主と近く親しく透明な交わりを持たせていただきましょう。

「求めているのはこれです、変わらずにしたいと思っているのはこれです」と答えるとするなら、皆さんならどう答えるでしょう。いろんな願い・祈りがあるだろうと思います。また私も私なりに、このように答えてみたいと思います。そして教会の皆さんとともにそれを祈り求めていきたいと願います。

* * * * * * * * * * * * * * * * * * * * *

福音の恵みを自ら受ける者として、福音の恵みによって誰かに仕えたいです。神に愛されている者として、いただいた愛によって他の人を愛する人になれますように。

求めているのはこれです。主の群れを建て上げることです。それはひとりひとりが主と結びつく。内にはお互いが主にあって結ばれる。外には愛と恵みを広げていくことです。

そして主の群れが続いていくようにしたいです。これまで先輩たちがいました。天に召された先輩もいます。先輩たちが大切にしてきたもの、築いてきたものを大切にしていきたい、大切にしつつこの時代に新しくしていきたい、と願います。

主の群れが続くようにしたいです。そのために若い人たちを励まし育てたい、会堂を新しく備えたい、そう願います。

どうかこれからの新しい時代に新しい伝道をできますように。主イエスの弟子として生涯を生きる人たちを育て養うことができますように。信仰の継承をできますように。

主よ、ひとりひとりがあなたご自身の御前に、自分の思い・自分の求めを率直にお話することができますように。そしてこの群れがひとつとなって御前に願い求め、心を注ぎ出すことができますように。アーメン。